様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１４４４

研究課題名（和文）ウクライナ政治体制の解明―求心的多頭競合体制の成立と変容

研究課題名（英文）Understanding an Ukrainian Political Regime: Rise and Transformation of a Competing Clans Regime

研究代表者
大串　敦（Ogushi, Atsushi）

慶應義塾大学・法学部（三田）・教授

研究者番号：２０４３１３４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、2014年以前のウクライナの政治体制を地方閥が競合する「求心的多頭競合体制」ととらえたうえで、2014年のユーロマイダン革命によって、それがどのように変容したのか、考察するものであった。本研究によって、「求心的多頭競合体制」が崩壊し、「中央・地方遊離型ポピュリスト体制」ともいうべき体制に変容したことが明らかになった。この体制では中央政界はポピュリスト的政治家とその政治勢力によって支配されているものの、この中央政治勢力が地方に地盤を持たず、中央政治が地方政治から遊離した体制である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、元来ウクライナの政治体制の変容を分析するものであり、しばしば「民主的」とのみいわれてきたウクライナ政治への見方の修正を求める点で学術的意義があると考えてきたが、2022年2月に開始したロシア・ウクライナ戦争によって純学術的意義を超えて社会的意義を持つに至った。ウクライナの戦時体制の形成をこの研究課題の一部として扱う必要が生じたためである。本研究で提唱した見方はおおむね妥当であったと考えられる。すなわち、ウクライナのローカル・エリートは自律的であり、これを戦時体制に組み込んだことでロシアに当初効果的に対処できたが、中央の統合能力は脆弱なままであり、領土奪還局面では大きな困難に直面した。

研究成果の概要（英文）：This research project attempted to understand a changing nature of an Ukrainian political regime. Before the Euromaidan uprising in 2014, the Ukrainian political regime can be characterized as a competing clans regime, in which regional clans competed one another at the central level. Since 2014, this regime has changed into a populist regime without roots in local political machines. This transformation occurred as results of the Euromaidan uprising, demise of the Donetsk clan, and the rise of Volodymyr Zelenskyi.

研究分野：比較政治学

キーワード：ウクライナ　政治体制　ロシア・ウクライナ戦争　地方政治

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究課題当初の背景は、2004 年のウクライナでのオレンジ革命や 2014 年のユーロマイダン革命を「民主化革命」として扱うことで、本来ウクライナの政治体制を特徴づけてきた地方閥の競合を見ていない点に問題を覚えたことであった。民主制と権威主義体制という二分法的な政治体制論をウクライナに当てはめるという発想が、ウクライナの政治体制研究をバイアスがかかったものにしているように考えられた。

そこで、既存の理論を当てはめることをせずにウクライナの政治体制を概念化し、変容の過程を考察することを構想した。

２．研究の目的

研究の背景を受け、本研究課題は、ウクライナの政治体制を多くの地方閥が競合する「求心的多頭競合体制」ととらえることで、民主制と権威主義体制の間で揺れ動いてきたウクライナ政治体制論に新しい視角をもたらすことを目的とした。この「求心的多頭競合体制」が再生産される仕組みと同時に、2014 年の政変によってどのように変化したのかも考察し、2014 年以降のウクライナの政治体制の概念化も試みる計画であった。

３．研究の方法

当初は、現地調査による堅実な実証研究によって、既存のウクライナ政治体制論を乗り越える予定であったが、本研究課題採択後、予定を大きく修正せざるを得ない事情が生じた。第一に、いうまでもなく新型感染症拡大により、フィールドワークの実施が不可能になった点である。ウクライナでの現地調査のみならず、国内での研究活動も大学への立ち入り制限、オンライン授業への対応などにより停滞せざるを得なかった。そして、第二に、新型感染症の影響がやや収まりつつあった 2022 年 2 月にはロシアによるウクライナ侵攻が開始された。これによりウクライナは退避勧告国になり、本研究課題期間中の現地調査は絶望的になった。

そこで、本研究課題は現地の報道や研究文献による資料調査に基づくものにならざるを得なくなった。また、研究の遂行によって、当初想定していた多頭競合体制とは異なった政治体制に 2014 年以降徐々に変容したと考えるに至った。この新たに成立した体制の概念化に時間をかけることになった。

さらに、比較対象として想定していたロシア政治であるが、こちらも新型感染症の影響がある間は現地調査できず、文献調査が中心になったこと、およびやはり戦争の影響で渡航中止勧告が出たこともフィールドワークを困難にした。

４．研究成果

本助成期間に、雑誌論文 9 本（うち国際的査読誌の英語論文 1 本含む）、書籍所収論文 5 本、学会報告 7 件（うち 5 件は国際学会）を公刊した。これらにより、次の学術的知見が得られた。第一に、かつて研究代表者が「求心的多頭競合体制」と名付けた地方閥が競合する体制は、2014 年のキエフでの政変と 2019 年のヴォロジムィル・ゼレンシキーの大統領就任および直後の議会選挙によるゼレンシキーの「国民の僕」党の勝利によって、解体した点を明らかにした。まず、国際ジャーナルに掲載した論文では、2014 年以前にウクライナ東部の主要政治勢力だった地域党は 2014 年に壊滅状態に陥ったが、代わって東部の政治勢力を糾合しようとした「野党ブロック」も、地方エリートを組み込むことに失敗して弱体化した点を解明した（ちなみに、本論文はウクライナ出身の著名な社会学者 V. Ishchenko に言及されるなど、一定の反響を得ている）。その後、ゼレンシキーと「国民の僕」党の勝利によって、独立ウクライナ史上初めて議会で単独過半数を獲得する政治勢力が誕生したが、2020 年の地方選挙では、「国民の僕」党は勢力拡大に失敗し、台頭したのは有力都市の市長が建設した各種の市長党であり、有力ローカル・エリートが中央政府と対立する構図が誕生した。この中央政府が地方に根を持たず、遊離したような状態の中で、大統領が場当たり的人気取り政策を出す体制を「中央・地方遊離型ポピュリスト体制」と名付けた。ゼレンシキーと「国民の僕」党の勝利の過程については、雑誌論文や国際学会で報告を行ったし、中央と地方の対立軸の形成に関しても国際学会で報告した。

第二に、戦時体制形成への含意も明らかにできた。「中央・地方遊離型ポピュリスト体制」の持続力は、2022 年 2 月に始まったロシア・ウクライナ戦争によって試されることになった。戦争に直面し、ウクライナも戦時体制を形成することになるが、戦時体制は戦前の体制の特徴を濃厚に受け継ぐ形で形成される。すなわち、強靭なローカル・エリートを戦時体制に組み込むことでウクライナは当初効果的に防衛戦を戦った。

第三に、この「求心的多頭競合体制」から「中央・地方遊離型ポピュリスト体制」への変容の考察によって、体制の変化を貫く、ウクライナ政治の構造的特徴も明らかにできた。つまり、中央政府が一貫して脆弱な点である。この「脆弱な中央」という特徴も現在の戦時体制は引き継ぐことになり、反転攻勢局面では統合された戦略を実行できずに、大きな困難に直面した。以上の第二、第三の知見に関しては、全国学会で報告し、書籍所収論文を公刊した。その後のロシア・

ウクライナ戦争の展開も、以上の知見を裏付けるものといえる。

　また、本研究期間内に、ウクライナの比較対象としてロシアを選び、ロシア政治に関しても研究を継続した。そこでは、第一に、2018 年のロシア大統領選挙では、ウラジーミル・プーチンは党派を超えた「全人民の指導者」を演出して大勝した。第二に、結果生じたプーチンによる個人支配は、あまりにも多くのことをプーチン個人に依存する状態を作り出した。この弊害はロシアのウクライナ侵攻決定過程でも見られたように考えられる。以上の過程に関しては、数本の雑誌論文を公刊したほか、ロシアにこのような個人支配を生み出した国際的な背景（民主化革命の恐怖や安全保障恐怖症）を議論する小論も公刊した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 大串敦	４．巻 955
２．論文標題 ウクライナ侵攻：「勝者なき紛争」がなぜ起こったか	５．発行年 2022年
３．雑誌名 世界	６．最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大串敦	４．巻 661
２．論文標題 求心的多頭競合体制から中央・地方遊離型ポピュリスト体制へ：2014年以後のウクライナ政治体制の変容と対露関係	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東亜	６．最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大串敦	４．巻 67
２．論文標題 ロシアの政策決定過程とウクライナ侵攻　：ブラックボックスの中	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ロシアNIS調査月報	６．最初と最後の頁 20-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ogushi Atsushi	４．巻 72
２．論文標題 The Opposition Bloc in Ukraine: A Clientelistic Party with Diminished Administrative Resources	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Europe-Asia Studies	６．最初と最後の頁 1639-1656
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/09668136.2020.1770701	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大串敦	4．巻 63
2．論文標題 プーチン体制長期化が示すもの―個人支配化とその問題点	5．発行年 2020年
3．雑誌名 外交	6．最初と最後の頁 114-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大串敦	4．巻 741
2．論文標題 プーチン体制の安定性	5．発行年 2021年
3．雑誌名 修親	6．最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大串敦	4．巻 992
2．論文標題 ウクライナ大統領選　圧勝の背景	5．発行年 2019年
3．雑誌名 世界	6．最初と最後の頁 18-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大串敦	4．巻 676
2．論文標題 全人民の指導者：プーチン政権下のロシア選挙権威主義	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国際問題	6．最初と最後の頁 5-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大串敦	４．巻 717
２．論文標題 低動員の戦時体制：ロシア・ウクライナ戦争下のプーチン体制	５．発行年 2024年
３．雑誌名 国際問題	６．最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 大串敦
２．発表標題 脆弱な中央・強靭な地方―独立後ウクライナの政治構造―
３．学会等名 日本国際政治学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Atsushi Ogushi
２．発表標題 Inside the Black Box: How Did the Kremlin Decide the Military Interventions in Crimea, Donbass, and Ukraine?
３．学会等名 the 11th East Asian Conference of Slavic Eurasian Studies（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Atsushi Ogushi
２．発表標題 Changing Political Cleavages in Ukraine
３．学会等名 10th World Congress, International Council for Central and East European Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 大串敦
２．発表標題 プーチンのグランド・ストラテジー？―ロシアの紛争介入を事例として
３．学会等名 日本国際政治学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Atsushi Ogushi
２．発表標題 Russian Deputy Ministers: Patrimonial or Technocratic Elites?
３．学会等名 International Symposium, ‘Global Crisis of Democracy? Rise and Evolution of Authoritarianism and Populism’, Slavic-Eurasian Research Center（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Atsushi Ogushi
２．発表標題 Toward a Party System Collapse? Chaotic Elite Realignment in Ukraine
３．学会等名 The 10th East Asia Conference on Slavic Eurasian Studies（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Atsushi Ogushi
２．発表標題 The International Origins of the Deeply Personalised Russian Political Regime
３．学会等名 the British Association for Slavonic and East European Studies (BASEES)（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計5件

1．著者名 歴史学会編	4．発行年 2022年
2．出版社 戎光祥出版	5．総ページ数 240
3．書名 歴史総合:世界と日本	

1．著者名 岩間　陽子、君塚　直隆、細谷　雄一	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 284
3．書名 ハンドブックヨーロッパ外交史	

1．著者名 塩川　伸明、松里　公孝、大串　敦、浜　由樹子、遠藤　誠治	4．発行年 2023年
2．出版社 東京堂出版	5．総ページ数 376
3．書名 ロシア・ウクライナ戦争 ： 歴史・民族・政治から考える	

1．著者名 細谷雄一、板橋拓己	4．発行年 2024年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 304
3．書名 民主主義は甦るのか？	

１．著者名 油本真理、溝口修平	４．発行年 2023年
２．出版社 法律文化社	５．総ページ数 262
３．書名 現代ロシア政治	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ロシアのポピュリズム的個人支配体制の成立とその問題
https://www.tkfd.or.jp/research/detail.php?id=3679
ロシアにおける個人支配体制成立の国際的起源
https://www.jiia.or.jp/research-report/russia-fy2023-01.html
合理主義者プーチンが「不合理な戦争」に踏み切った理由を再考する
https://www.newsweekjapan.jp/asteion/2023/01/post-98.php

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関